愛媛大学教育学部紀要　第71巻 123-132 2024

不登校児童生徒の類型と回復過程に着目した フリースクールスタッフの支援に関する研究

（愛媛大学教育学研究科心理発達臨床）　菊池　ほの香
（愛媛大学教育学部）　相模　健人

A study of supports of free school staff providing for truant students evaluated with the classification and recovery process of school refusal

Honoka KIKUCHI and Takehito SAGAMI

要約：本稿では不登校の類型と回復過程の両方の視点からどのような関わり方をフリースクールにおいてしているのか、インタビューを通して独自性や共通性を明らかにすることを目的とし、インタビューを基に、複線経路等至性モデル（TEM）を用いて分析を行った。その結果、類型や回復過程ごとに対応が異なっていることが判明した。これは、それぞれの類型や過程によって児童生徒が求めているものが異なっていることに加えて、フリースクール設立に至るまでの個人の経験が、理念や関わり方に反映されていることが原因と考えられる。こうした個々の特性に合わせて柔軟に対応できることはフリースクールの利点と言える。

（2024 年 9 月 2 日受付、2024 年 11 月 27 日受理）

キーワード：不登校（school refusal），フリースクール（free school），複線経路等至性モデル（Trajectory Equifinality Model；TEM）

１．はじめに

令和 5 年度の小・中学校における不登校児童生徒数は 346.482 人である。不登校児童生徒について佐藤（2005）はほとんど例外なく、学校や教師への不信、敵意、不安、恐怖、自分自身については自己疎外感、罪悪感、絶望感、自殺願望など心の傷みや葛藤を抱えていると述べており、海野（2016）も不登校期間中の心情として他人の目が気になる、いらいらする、焦りや不安を感じる、孤独や寂しさを感じるということを述べている。以上のような不登校に起因した「学校に行きたくない」、行かなければならないという葛藤や焦り、将来への不安、孤独感、自信のなさなどの否定的な感情が問題だと考える。

不登校のタイプに応じた関わり方が研究されているが、原因から分類したものが多い。不登校になった背景は様々であり、簡単に言葉で説明できるものではない。不登校の特徴から分類したものとして、五十嵐,萩原（2004）は中学生の不登校傾向を登校し

ても教室以外の場所で学校生活を送りたいと思っている「別室登校を希望する不登校傾向」、友人との遊びや深夜徘徊などの行動のために学校へ行きたくないと感じる「遊び・非行に関する不登校傾向」、学校に行くよりも家にいたいという気持ちを示す「在宅を希望する不登校傾向」、少しのことで気分が落ち込み学校へ行きたくないなどの精神症状や身体症状が随伴している「精神・身体症状を伴う不登校傾向」の４つに分類した。

近年、不登校の増加を受けて、現在では学校以外の居場所の重要性が高まっている。文部科学省（2019）の「不登校児童生徒への支援のあり方について」では、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があることと示されている。このような指針を受けて、精神的にも、将来、経済的にも自立するための「社会的自立」を目的とした施設が必要であり、子どもたちにとって学校以外にも居場所をつくることの重要性が示された。学校以外の居場所の１つにフリースクールがある。フリースクールとは一般に、不登校の子どもに対し、学習活動、教育相談、体験活動などの活動を行っている施設である。保健室登校や適応指導教室と異なる点として理念によって活動方針や関わり方が異なる点があげられる。

また、不登校の経過について海野（2016）は①前駆期②開始・進行期③混乱・ひきこもり期④回復期⑤再登校期という段階があると述べている。①前駆期とは体調不良の訴えや行きたくない素振り、行くか行かないか葛藤する時期②開始・進行期は頭痛や腹痛など身体症状を訴え、学校に行きたくても行けない時期③混乱・ひきこもり期は登校刺激に粗暴な言動を示したり、部屋にひきこもったり、登校の意欲に欠ける時期④回復期はさらに始動期、帰心期、準備期、挑戦期に分かれており、始動期は自己を真剣に見つめ始める、帰心期は学校や友達への関心を示す、準備期は家事や勉強に取り組む、挑戦期は再登校のために具体的に行動する⑤再登校期の段階があると述べている。再登校することだけが不登校の回復ではないため、本研究では精神的に安定し、元気を取り戻した状態を回復とする。

２．目的

これまで学校としての不登校の対応について研究がされてきたが、フリースクールでの対応を取り扱っているものは少ない。特に、フリースクールは理念による違いから学校とは異なる対応をしていると考えられる。そのため本研究では、不登校の特徴から分類されている五十嵐，萩原（2004）を採用し、回復過程は回復期が細かく分かれていることや、不登校の経過を述べている海野（2016）を採用し、両方の視点からどのような関わり方をフリースクールにおいてしているのか、インタビューを通して独自性や共通性を明らかにすることを目的とする。

３．方法

（1）調査方法

(ⅰ)調査対象：2022 年度α県内のフリースクールで　働いているスタッフ８名（平均年齢 46.1 歳）を対象とした。

対象者は以下の通りである。

フリースクールa	A（40歳代女性） B（40歳代男性）
フリースクールｂ	C（50歳代女性） G（30歳代男性）
フリースクールｃ	D（60歳代女性）
フリースクールｄ	E（20歳代女性）
フリースクールe	F（40歳代女性）
フリースクールｆ	H（50歳代男性）

(ⅱ)調査時期と手続き：調査は 2022 年 11 月から 2023 年 8 月にインタビューガイドに基づいた半構造化面接を 60 分程度行った。

(ⅲ)インタビュー内容：面接内容は研究参加者の許可を得て、IC レコーダーに録音した。インタビューガイドの内容は独自に作成した。フリースクールについて６項目、教育方針について５項目、学習について５項目、フリースクールに通う児童生徒について 10 項目、インタビューを受けた感想等２項目の全部で 28 項目である。

（2）倫理的配慮

愛媛大学教育学部倫理審査委員会の承認を受けた上で、本研究について研究協力者に説明し、研究協力者自身の意思でインタビューを中止できることや適宜休憩を挟むことなどを告げた上で、同意書にて同意を得ている。また、結果についても同意を得ている。

（3）分析方法

本研究では、複線経路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model:以下 TEM）を分析方法として用いる。サトウ（2009）によると、TEM ではじめる質的研究とは「人間と環境を一種のシステムとして考え」、「人間を環境から独立した閉鎖システムとして捉えるのではなく、環境と常に交流・交互作用している開放システムとして捉える」と述べている。そして、「個人の人生を時間と共に描くことを目標とし、ある経験に至る経過やある経験を経たあとの道筋を描く」としている。

また、サトウ（2009）によると研究の中に出てくるいくつかの図を TEM 図と呼び、一番下の矢印（→）が非可逆的時間を表し，あとは出来事や経験に至るさまざまな経路を描いていると説明している。

そして、等至点（Equifinality Point:以下 EFP）については、「第一に研究者が抱いた興味関心を示すものとして機能する」とあり、「研究者が研究したい現象こそが等至点なのであり、その経験をした人をご招待して、そこに至る径路を描いていこうというのが TEM である」と述べている。

「分岐点」については、ある経験において、実現可能な複数の径路が用意されている、もしくは発生する状態のことと説明している。そして、ある地点からある地点に移動するためにほぼ必然的に通らなければならない地点のことを必須通過点という。

また、EFP に向かうことを後押しする力 Social Guidance(以下 SG)を↑で表し、反対に EFP に向かうことを阻害する力 Social Direction(以下 SD)を↓で表している。

本研究では不登校の児童生徒がフリースクールに来てからの関わり方を類型と回復過程という経過について質的研究を試みるものであり、スタッフへのインタビュー調査をもとに TEM 図を作成することで、不登校の児童生徒がどのような関わりによってどう元気になったのか過程を見て、フリースクールの独自性や共通性が分析できると考える。

４．TEM による分析結果

インタビューに応じてくださったフリースクールに勤務しているＡからＨの結果をまとめて Figure1～5 として以下に示す。

５．考察

⑴ フリースクール設立前

Figure１から自分や家族が不登校だったという当事者である人と、そうではない人で分かれた。Ａ、Ｃ、Ｆ、Ｇの不登校の当事者だった人は自身の経験がＡやＣのように不登校の子を持つ親の気持ちの理解につながったり、自分が不登校だったときに必要だったことを取り入れたりと当事者としての経験が現在のフリースクールでの関わり方としてあらわれていた。また、教員や学習塾の先生、習い事の先生、小児科スタッフなど、フリースクール設立前に全員が、子どもと関わる仕事を経験している。特に教員をしていた人は学校に適応できない子どもや就職できない子ども、個別での支援が必要な子どもな

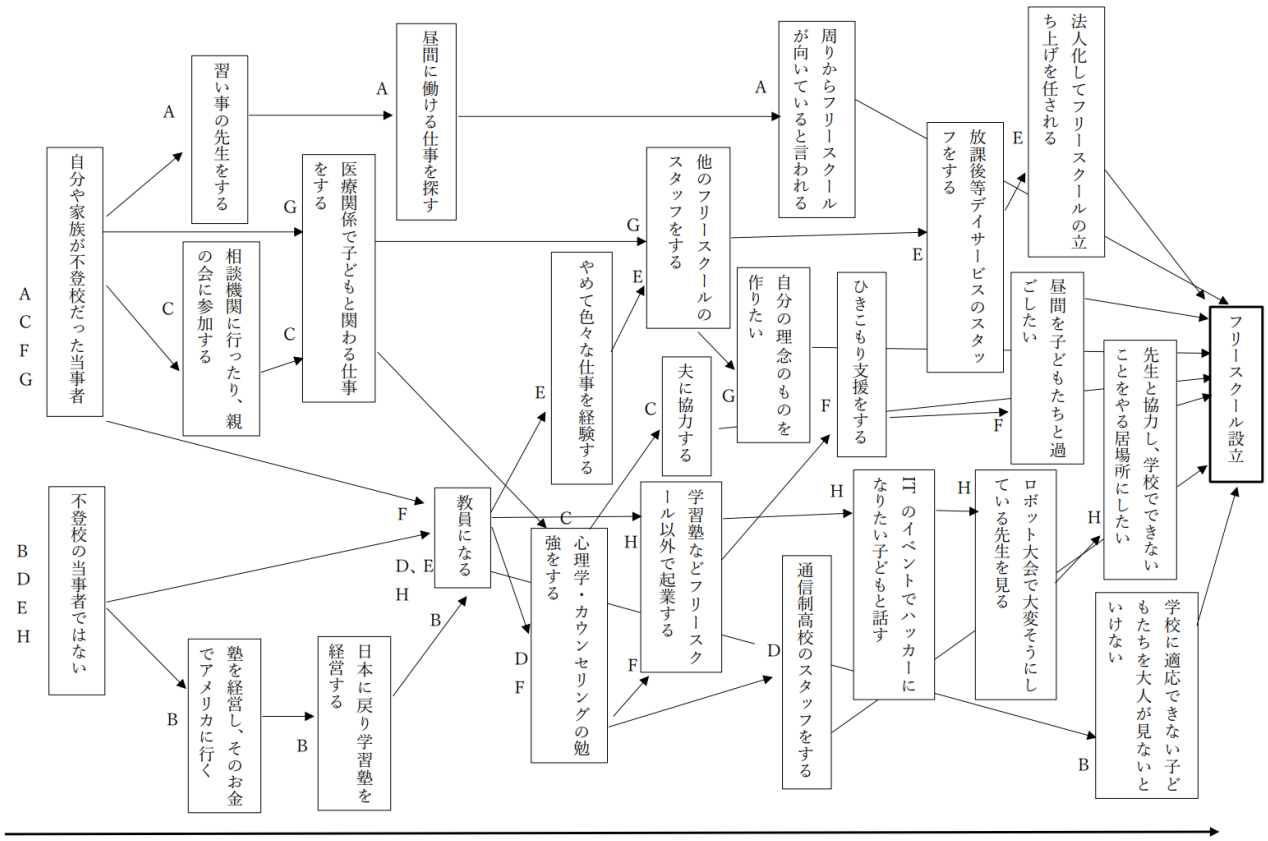

Figure1　フリースクール設立前

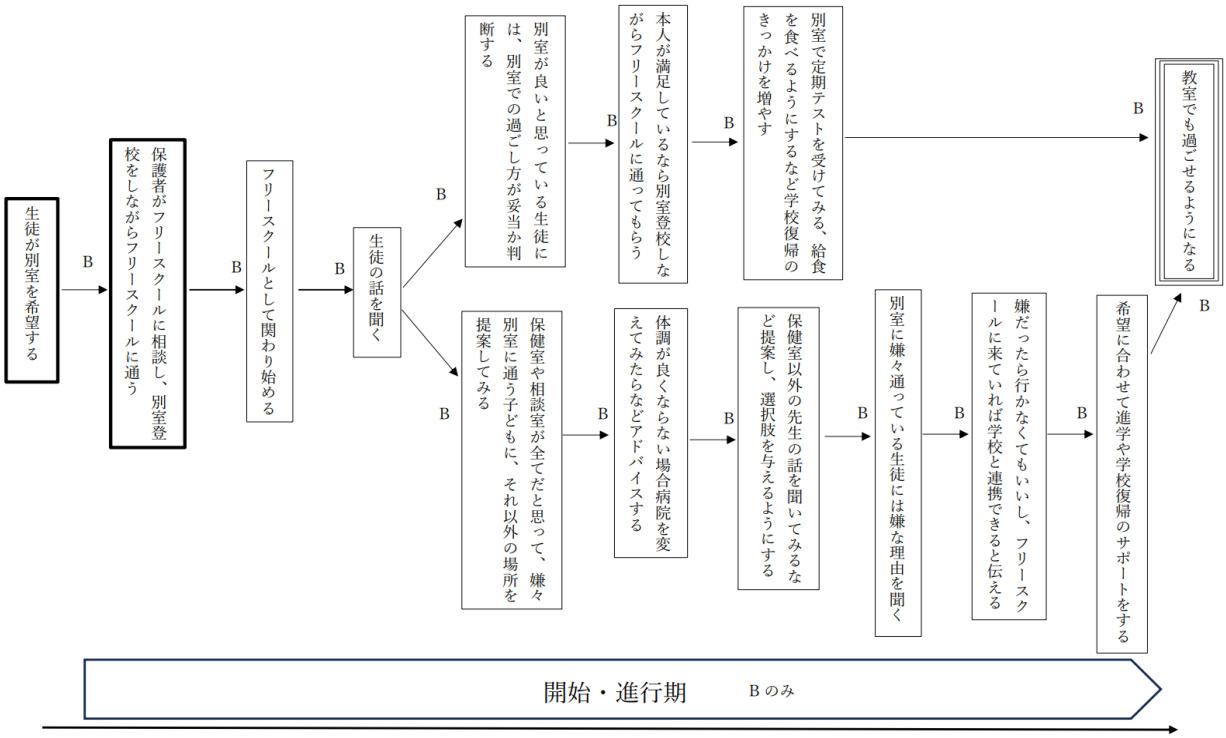

Figure2　別室を希望する不登校

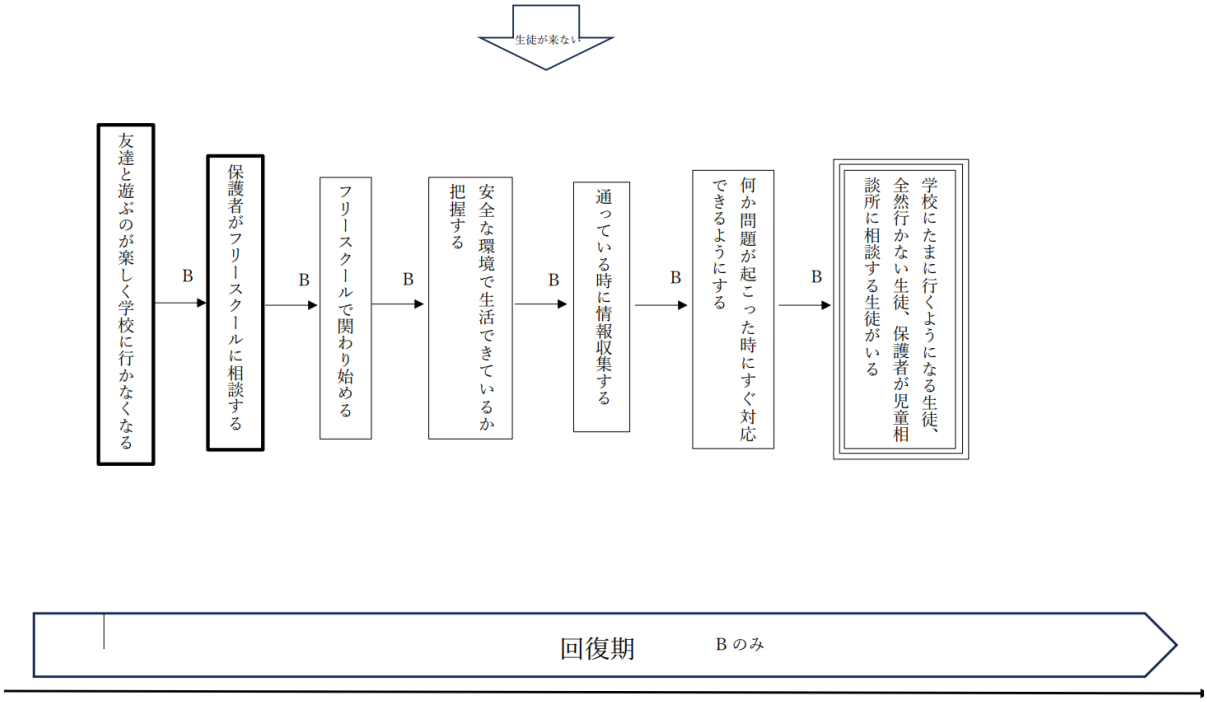

Figure 3　遊び非行に関する不登校

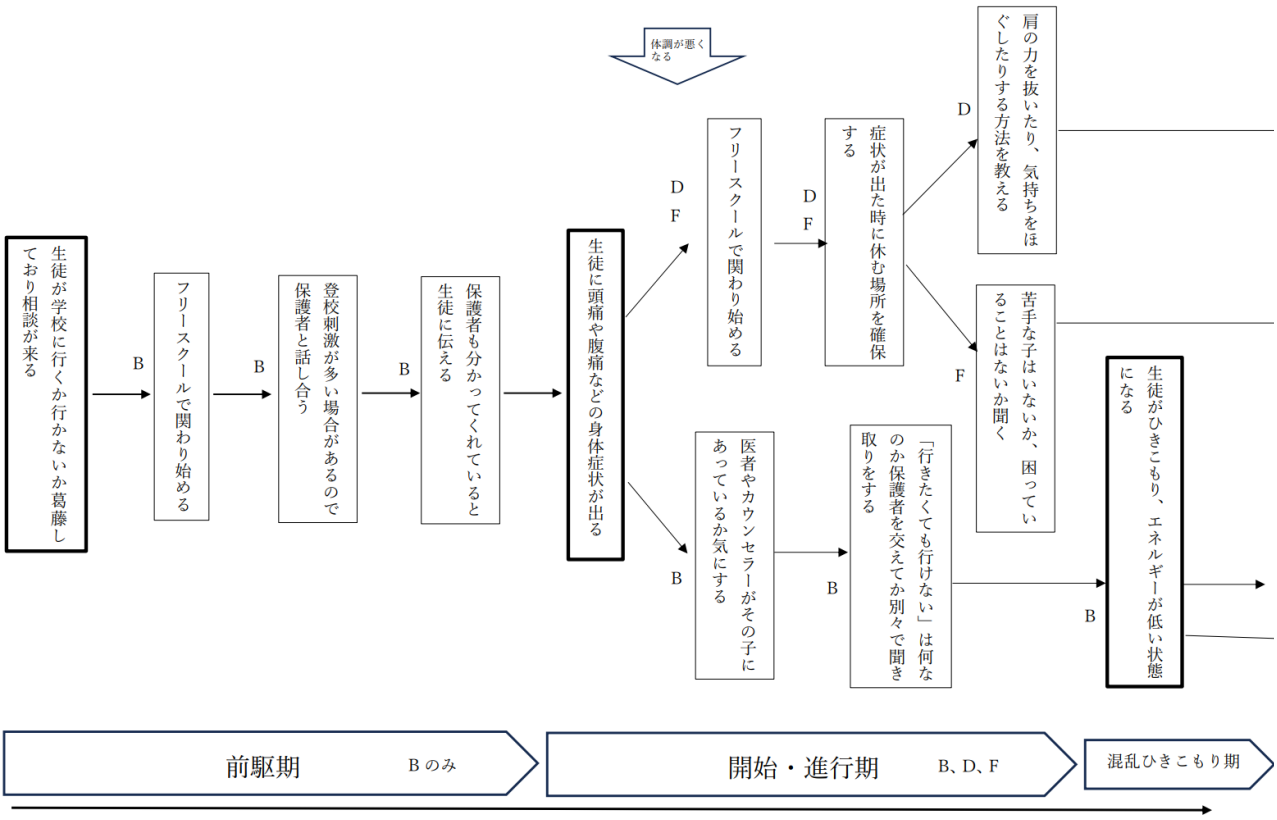

Figure 4　精神身体症状を伴う不登校①

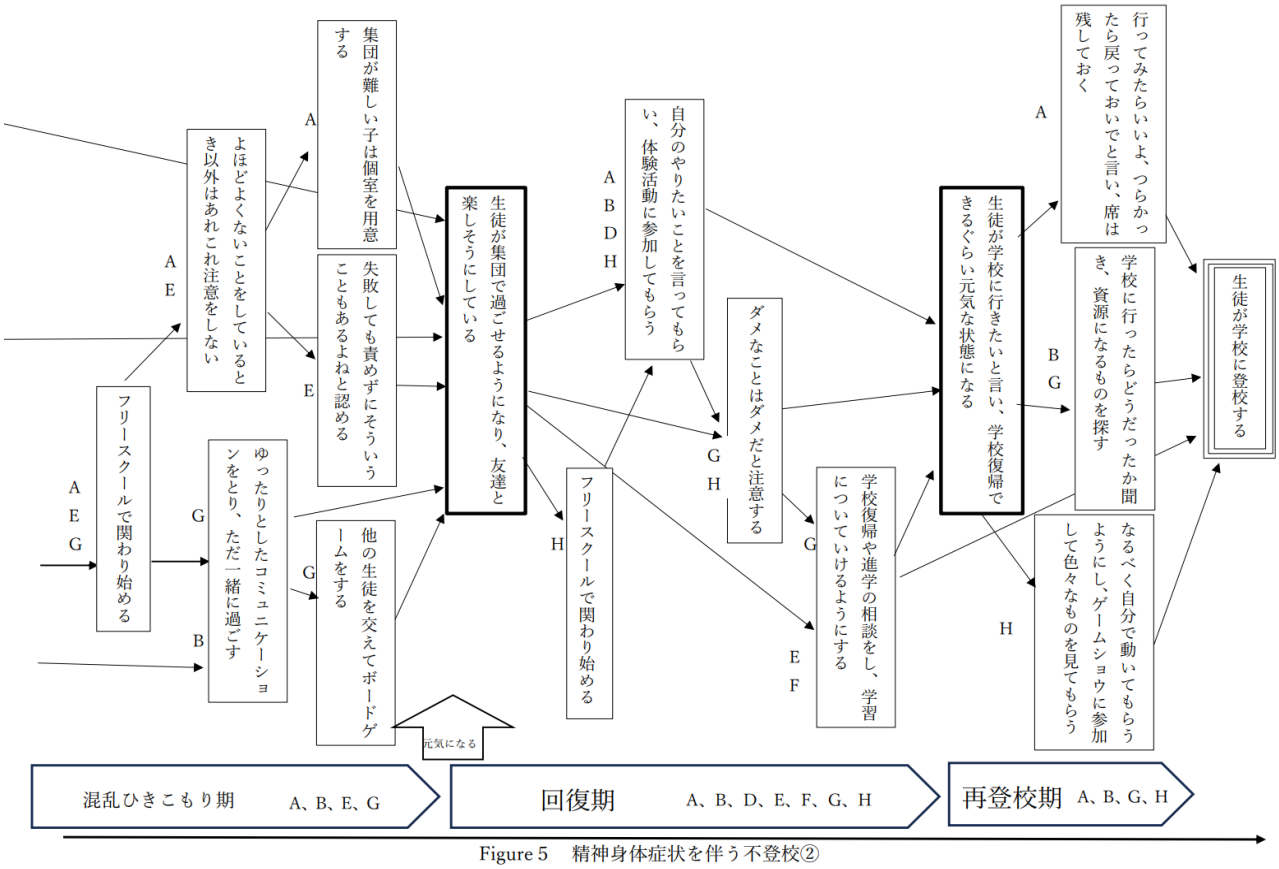

Figure 5　精神身体症状を伴う不登校②

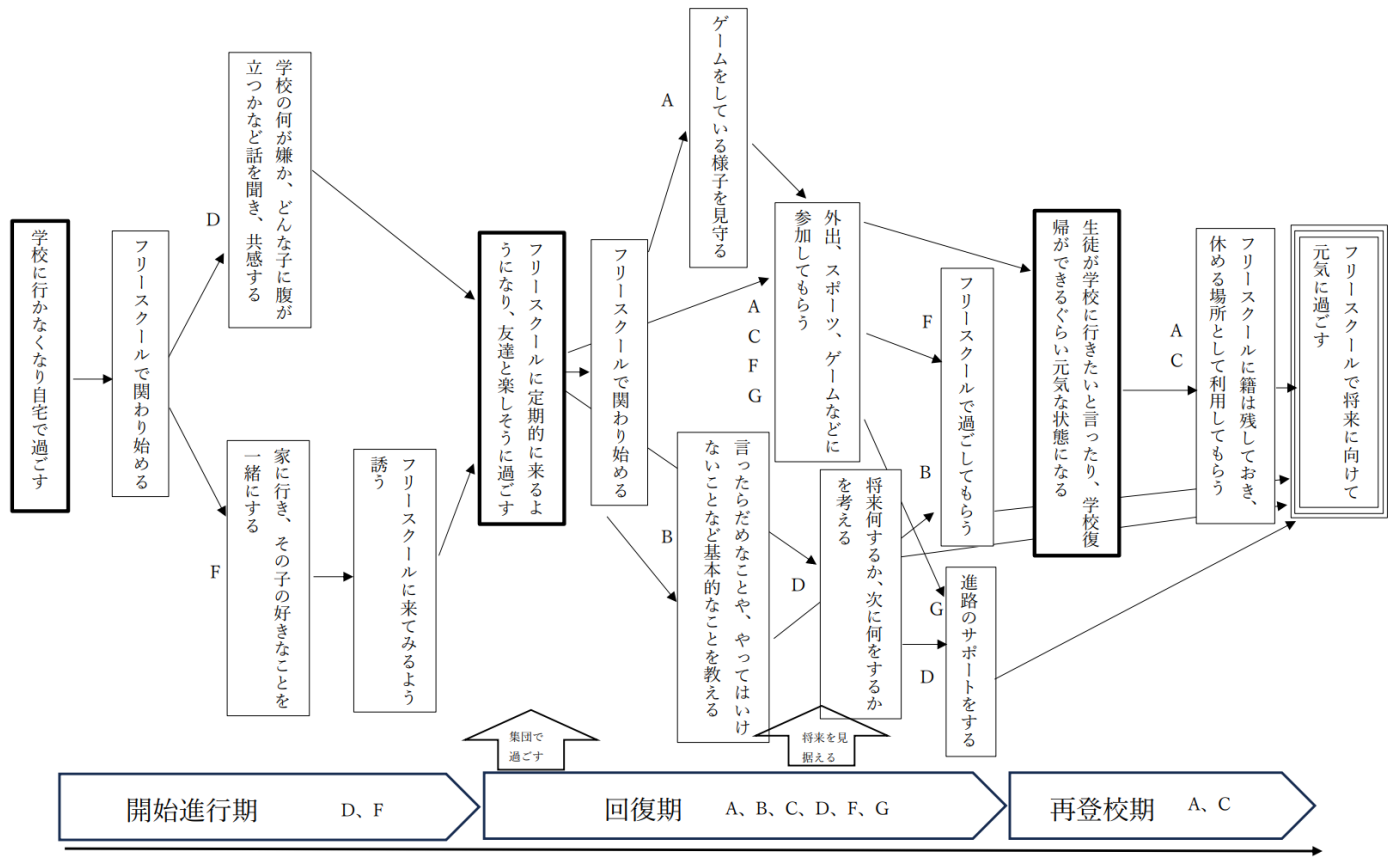

Figure6 在宅を希望する不登校

ど困難を抱える子を見て、心理学を勉強したり、起業して困っている子どもを支援したりしている。教員のストレスに影響する要因について佐野，蒲原（2013）はまず、教員の悩みには「教材準備の時間が十分に取れない」「作成しなければならない事務書類が多い」「特別な支援が必要な児童・生徒への対応が難しい」などがあり、教員の魅力と悩みの回答を合わせてみると、教員が教職の魅力としてあげている児童生徒への関わりに十分な時間がとれないことが多くの教員のストレスの大きな要因となっていると述べている。インタビューの中でも個別で支援が必要な子どもを見てあげられなかった、不登校の対応をどうしたらよいかわからなかった、大人が見てなければならないと思ったなど児童生徒との関わりに時間がとれず、後悔や不満を抱いている人もいた。そういった感情から、個別に支援ができて深く関われるフリースクールを選択したと考えられる。

またHのいるフリースクールfは独自のカリキュラムのある職業教育をしている。職業教育とは一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育である。文部科学省(2011)の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の職業教育の課題では、「現状において、職業教育は一部を除いて、基本的には学校内で完結する内容として教育課程を編成するという側面が強調されてとらえられがちであり、今後、その実行性をより高めていくことが必要と考えられる」と述べられている。このことからも専門性を身につけ、仕事をもつために職業教育が必要ではあるにも関わらず、現状は学校の中でできるような内容になってしまうため限界があり、専門的な職業に従事するための知識や技能など身につけられる場所としてもフリースクールが機能する可能性が今後考えられる。

他の職業を経験せずに、フリースクールを設立する人にはおらず、自身の経験が反映されている。今後、専門職の可能性も残されている。

⑵ フリースクールの特徴

社会的自立について理念としているところと、人としての成長を理念としているところに分かれていた。しかし、最終的に社会に適応するというところは全フリースクールで共通しており、体験活動や自分への気づきから、フリースクールを卒業した後を見据えて、人として成長することを理念としている。α県にはフリースクール協議会があり、それぞれのフリースクールが紹介されているパンフレットが小中学校で配られていることから、以前よりも情報が得やすくなっている。体験活動重視のフリースクール、学習重視のフリースクール、居場所を重視しているフリースクール、特別支援教育の要素があるフリースクール、専門教育的なフリースクールなど、様々なフリースクールがあり、それぞれ活動、関わり方、来ている子どもたちが違うことからも、個人にあったところを選ぶことができると考えられる。

⑶ 類型について

Figure2、3から別室を希望する不登校と遊び・非行に関する不登校はBしかいなかった。これはBのいるフリースクールaが今回インタビューをした中で最も生徒の在籍数が多く、様々な生徒に対応しているということが考えられる。今後在籍数が多くなると多様な不登校に対応する機会が増えると考えられる。その中で遊び・非行に関する不登校は情報収集したことを基に児童相談所や学校などの機関と連携することが求められる。そして、別室を希望する不登校については、別室登校している段階でフリースクールに来ることは他のフリースクールでは見られなかったが、Bは関わることがあるということだった。Bは相談業務として、今は別室に登校しているが、学校に行きづらくなっているという状態の生徒の相談も担当しているということだった。

次に精神身体症状を伴う不登校についてほとんどのフリースクールにいる生徒の多くがこの類型に当てはまるとインタビューの中で語られた。文部科学省(2020)不登校児童生徒の実態調査の「学校を休んでいる間の気持ち」では「ほっとした・楽な気持ちだった」「自由な時間が増えてうれしかった」、「勉強の遅れに対する不安があった」、「進路・進

学に対する不安があった」、「学校の同級生がどう思っているか不安だった」等あり、学校を休んだことで不登校の原因となったことから離れられてほっとする反面、学習や進路と様々な不安を抱えて過ごしていることが分かる。また、宮下，藤野（2010）は不登校期間中の心情、不登校に陥った当初の心境についての調査では「とにかく苦しく、何をしたらよいのかわからなかった」、「学校に行かなくてはいけないとは思うが、行こうと準備をし、行った時のことを考えると体が動かなくなり吐き気や頭痛、腹痛がした」と、ほとんど同じような記述をしていた。これは他人への不信感や学校に登校していないことに対する罪の意識などによって、心身ともに余裕のない状態であることがわかる。このようなエネルギーが低い状態の生徒に対して、最初は、とても悪いことをしている時以外はあまり注意しないことやただ一緒に過ごす、ゆったりとしたコミュニケーションをとるということをしていた。

そしてどのフリースクールも体験活動や学習などは回復期に入り、友達と楽しく過ごせるようになってからにしていた。吉井（1999）はフリースクールの役割の一つに自己の修復があると述べている。フリースクールでは立場や年齢を越えてともにある仲間として、楽しみ、学び、語り合い、そして支え合うことに価値がおかれている。そしてフリースクールでは自分をごまかして大人の強制や期待に従うのではなく「自分は何をしたいか」ということに価値がおかれ、余計な仮面をかぶらないで自分自身と向き合うことが尊重されていると述べている。こうして自分自身と向き合いながら、仲間と自由な交流が行える時間、空間、関係が保障されるからこそ、自己の修復が可能になるため、まずは安心できる居場所であるということを生徒が思うようになってから、体験活動をすすめるようにしていると考えられる。

回復期になるとダメなことはダメと社会的規範を意識させ、自立に向けて注意をしていた。これは回復期で十分に居場所として機能しているからこそできることだと考えられる。また、國分，門田（1996）は保健室登校の支援モデルについて述べており、その中に現実原則（必要な決まりごと）をきちんと教えることがある。これは友達に対して、わがままな行動をとったり、いけないことをしたときにはきちんと話して諭すようにすることや、保健室に慣れてきて、悪いことをしていたときに、見てみぬふりをしないでその場で注意し指導することなどである。このように居場所として機能してから現実原則を教えることで、友達との関わり方ややってはいけないことが分かるようになり、登校し始めたときに限らず大人になってからも困らないようにしている。

再登校期で共通していることとして、どのフリースクールも学校にずっと行くようにすすめるのではなく、相談できる場所、息抜きできる場所としてフリースクールを残しており、学校との連携を大事にしていた。このようにすることで、生徒が、学校に行けなくてもフリースクールがあると思うことができ、学校に行くハードルが少し下がり、困ったことがあってもすぐに相談できるため、安心して登校することに繋がると考えられる。結果的に精神身体症状を伴う不登校は学校に登校することにつながっており、これは心身の回復だけでなく、学校のようにカリキュラムが決まっていないからこそ体験を重視し、個人の課題に合わせた対応ができるのだと考えられる。

次に Figure 6 より在宅を希望する不登校はゲームなど好きなことをしていて家から出られず、生活リズムが乱れていたり、言動や行動が個性的で学校に馴染めないようである。フリースクールに来てからは楽しそうに過ごしている生徒が多いため、このタイプも体験活動をしてもらっていた。体験活動をしつつ、精神身体症状を伴う不登校と同じように、言ったらダメなことや、やってはいけないことなどの現実原則を教えるということをしている人もいた。そして、精神身体症状を伴う不登校にとっての体験活動は主体性を育てることや、心を回復するという意味合いが大きいが、在宅を希望する不登校の生徒が、体験活動で外出やスポーツ、ゲームに参加することで、対人スキルや社会性を身につけるようになると考えられる。在宅を希望する不登校のよう

に、学校に行くよりも家にいたいという気持ちが強いひきこもりの支援について山吹（2020）は「ひきこもり」は、人間関係に傷つくことを避けての防衛手段ではあるが、人間関係による心の傷つきを回復するのもまた人間関係なのであると述べている。このことからフリースクールで他者と関わる中で対人関係や社会的規範を学びながらも、心の傷つきを回復しているのだと考えられる。そして、在宅を希望する不登校はまずは安定してフリースクールで過ごすことを目的としていることが多いため、学校復帰に向けてよりも、将来に向けてどうするか考えたり、生きていく上で基本的なことを教えるなど、将来に向けての関わり方をしていた。これは文部科学省(2018)の「不登校児童生徒への支援の在り方について」でも、「学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること」と示されており、フリースクールで過ごす生徒たちが自立できるよう意識して関わっていることが分かる。

類型別でみると遊び・非行に関する不登校や別室を希望する不登校はフリースクールで扱うことが少ないことや、精神身体症状を伴う不登校は再登校に向かっていくが、在宅はフリースクールで過ごす生徒が多いということが分かる。そして類型、回復過程それぞれ対応が異なっていることが分かり、回復過程については生徒がどんな状態か考えながら、エネルギーが低い状態のときは無理をさせないなど一人一人に応じた対応をしていた。そして、類型によって対応がことなっている理由については、類型によって、その子どもが求めているものや必要としているものが異なるからだと考えられる。別室を希望する不登校は教室以外の安心できる居場所、遊び・非行に関する不登校は安全に過ごせる環境、精神身体症状を伴う不登校は落ち着いていられる居場所、在宅を希望する不登校はコミュニケーションや基本的なことを学ぶ機会などそれぞれ必要なものが違うからこそ関わり方も変えているのだと考えられる。

⑷ フリースクールの意義

日本のフリースクールは海外のオルタナティブスクールのようにはまだなっておらず、不登校の子どもの居場所としての役割が大きいが、本研究の中ではHのいるフリースクールのように独自のカリキュラム作っているところもあった。適応指導教室はカリキュラムに沿って行われており、フリースクールのようにそれぞれ独自のカリキュラムがあることで、学校でできないこともできるという利点はあるが、理科の実験など金銭面や規模の問題でできないことはあり、設備が整っていないフリースクールもある。オルタナティブスクールのようになっているフリースクールが少ない理由として、金銭面からできないことがあるということもあるが、日本では海外よりも不登校対応の問題を大きく取り上げられており、不登校の子どもの居場所を保護者も子どもも必要としているからだと考えられる。しかし、学校教育と同じカリキュラムではなく、専門教育も必要なことであるため、今後は不登校対応のための居場所としての役割だけでなく、専門的な学習も増えていくと考えられる。本研究を通して学校復帰だけを視野に入れるのではなく、大人になってから社会的自立ができるよう支援していることが示された。伊藤（2022）は「フリースクールを卒業することはゴールではなく、自立を目指して地域・社会で生きていくためのスタートです」と述べており、どのフリースクールも社会的自立を目的としているところが共通していた。そして、社会的自立のために、学校でできないような体験活動や専門的な学習ができることや、個別の支援計画を通した特別支援教育や、不安感が強く対人面でしんどさを抱えている、切り替えが難しいなどの個々の課題に応じて子どもたちと向き合って柔軟に対応できることはフリースクールの強みである。フリースクールの方針や、類型ごと、回復過程ごとに関わり方を変えており、細かくスタッフがアセスメントして状況に応じた声掛けをすることが大事であり、このような対応をすることで、徐々に元気を取り戻していくと考えられる。実際に、不登校になった子どもがフリースクールに入って元気になってからもう一度学校に行ったり、将来に向けて進んでいったりしており、今後フ

リースクールの意義や重要性が増していくと考えられる。

６．今後の課題

遊び・非行に関する不登校はそもそも数が減っており、今回インタビューで答えたのはＢのみだったためどのような対応がフリースクールで行われているのかは調べることは課題である。そして、今回はα市内のフリースクールだけだったため都市部や農村部の活動は土地を活かしてα市内ではできないような活動も組み込まれていると考えられる。そのため、独自のカリキュラムをもつフリースクールの対応の仕方や、オルタナティブスクールについても調べる意義があると考える。そして、今回は主に学校に行きたくてもいけなくなった子どもたちの対応が中心であり、自分から何か学びたいことがあり学校に行かなくなるような積極的不登校に対するフリースクールのやり方については今後も調査する必要がある。

付記

本研究の一部は日本心理臨床学会第 42 回大会で発表された。

７引用文献

⑴ 五十嵐哲也・萩原久子　2004　中学生の不登校傾向と幼児期の父親および母親への愛着との関連　教育心理学研究，第 52 号，264-276.

⑵ 伊藤美奈子　2022　不登校の理解と支援のためのハンドブック　ミネルヴァ書房，312.

⑶ 國分康孝　門田美恵子　1996　保健室からの登校－不登校児への支援モデル－　誠信書房，184.

⑷ 宮下治　藤野佑輔　2010　不登校児童生徒の生活と心理の実態に関する調査－不登校経験者への調査をもとに－　人間環境学会，第 13 号，61-75.

⑸ 文部科学省 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/__icsFiles/afieldfile/2011/02/22/1302048_1.pdf　（2023 年 12 月 20 日確認）

⑹ 文部科学省　2018　「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm　（2023 年 12 月 20 日確認）

⑺ 文部科学省　2019　不登校への対応について https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121505/004.htm　（2023 年 12 月 20 日確認）

⑻ 文部科学省　2020　不登校児童生徒の実態調査 https://www.mext.go.jp/content/20211006-mxt_jidou02-000018318_03.pdf（2023 年 12 月 20 日確認）

⑼ 佐野秀樹　蒲原千尋　2013　教員ストレスに影響する要因の検討－学校教員の労働環境と意識 東京学芸大学紀要，総合教育科学系Ⅰ，64 号，189-193.

⑽ 佐藤修策　2005　不登校「登校拒否」の教育・心理的理解と支援　北大路書房，349.

⑾ サトウタツヤ 2009 「TEM で始める質的研究 ―時間とプロセスを扱う研究をめざして」誠信書房，222.

⑿ 海野和夫　2016　Q&A 不登校問題の理解と解決　日本評論社，241.

⒀ 山吹健司　2020　「ひきこもり」に対する支援の方法を探る－生活困窮者自立支援制度では他機関と連携する前段階においてどのような関りが必要か－　社会臨床雑誌，第 28 巻 1 号，4-13.

⒁ 吉井健治　1999　不登校を対象とするフリースクールの役割と意義　社会関係研究第５巻，第 1・2 号，83-104.